

# 大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：武藏 諒祐（臨床心理学コース）

<strong>■ 研究題目</strong>
フリースクールにおけるアイデンティティ形成過程— 二重サイクルモデルと前方視的再構成法による検討—
<strong>■ 研究代表者・分担者（氏名、コース）</strong>
武藏 諒祐（臨床心理学コース・博士課程前期2年）
<strong>■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）</strong>
<h2>1. 問題と目的</h2> <p>「不登校」は現在、学校教育、日本社会における深刻な問題となっており、そのオルタナティブな教育の選択肢の一つとして、フリースクールへの社会的関心が高まっている。</p> <p>文部科学省（2016）は、不登校児童生徒への支援について、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があると述べており、場合によってはフリースクールなどの民間施設や NPO を活用し社会的自立への支援を行うことを推奨している。</p> <p>青年期はアイデンティティを確立する時期とされ（Erikson, 1959）、アイデンティティの確立あるいはその確立のためのプロセスは、進路を主体的に考えることや、社会的な自立に寄与しうる。形成のプロセスには、自分の多様な選択肢を探求する“探求”と、選択した選択肢を吟味していく“コミットメント”とを行ったり来たりしながら進むという二重サイクルモデルがある（Luyckx et al., 2006）。現代では探求はアルバイト、インターンシップ、サークル、学業、ボランティア等の役割実験を通じて行われるとされているが、筆者が以前勤めていたフリースクールでは、外部から“大人”を招待しての講演や、遊びの体験、年齢の異なる先輩・後輩や、大学生のインターンとの斜めの繋がり（山本・宮崎, 2020）からは、通常の学校現場にはない体験、ならびに探求体験をもたらしていたと考える。</p> <p>フリースクールでの体験を通じたアイデンティティ形成について、二重サイクルモデルから捉えた研究は本邦においては少ない。そこで、フリースクールでの体験と、アイデ</p>

ンティティプロセスとの関連性を検討することで、フリースクールのオルタナティブとしての可能性を明らかにする。

まずは研究 I として Web アンケートを用いた調査から、フリースクール体験とアイデンティティ形成との関連性について検討する。また、研究 I ではフリースクールに所属している青年期の児童・生徒を対象にして、「現在における」経験とアイデンティティ形成への影響が検討されている。研究 I で焦点化されているのは、アイデンティティ形成に寄与するような、どのような取り組みが行われているか、という視点である。実際にフリースクールでの経験はその後どのようにアイデンティティの確立に寄与していったのかを明らかにしない。そこで、フリースクールを卒業した人を対象に質的な調査を行うことによって探索的に調査していく。また、アイデンティティは、その後の人生の経験の仕方、また経験の選択と相互に影響し合っているだろう。後から経験したことに基づいて、それ以前の経験が意味づけられ直されて語られていくこともあり、これを物語の逆行性という。フリースクールの卒業生に、フリースクール在学時を回想してもらうことには、後方視（retrospective：回顧）的部分があり、現在では当時に知りえなかった結果が分かっているため、過去の経験は多分に再構成されている可能性がある。出来事の起こる以前に視点をおいて、そこから出来事を見ること（前方視：prospective）によって、「実際に私たちが経験したもの」に迫ろうとする手法（前方視的再構成法）が考案されている（白井, 2022）。研究 II では、フリースクールの卒業生を対象に、前方視的再構成法の要素を取り入れたインタビュー調査を行い、フリースクールでの経験が現在においてどのように意味づけられているのかを検討する。

## 2. 研究 I

### 2-1 目的

研究 I では、現在フリースクールに通っている青年期の児童・生徒を対象にして、フリースクールでの経験とアイデンティティ形成への取り組みとの関連性について検討する。

### 2-2 方法

#### 調査対象者

参加者は、クラウドソーシングサービスである Crowd Works (<https://crowdworks.jp>) に登録しているクラウドワーカーおよびインターネットリサーチサービスである Freeasy (<https://freeasy24.research-plus.net>) に登録しているモニターから回答者を募集した。調査の対象者を「現在フリースクールに通っている中学生、高校生以上の方」または、「そういったお子さんをもつ親御さん」とした。後者の場合は、「質問項目はお

子さんに回答してもらってください。」と教示した。通っているフリースクールの運営形式や規模は問わないこと、本調査でのフリースクールの定義は「学校では教育サービスを受けられない児童生徒に対し通年で教育サービスを提供している民間施設」(本山, 2011)であることを明示した。

Crowd Works を通じて 47 名, Freeasy を通じて 175 名, 計 222 名の回答が得られた。適切でない回答をしたものを除外し, 103 名を有効回答とし分析の対象とした。

### 調査内容

(1) **フェイスシート** 性別, 年齢, 学年を尋ね, 学年が高校生である場合は, 学校種別を尋ねた。

(2) **フリースクールへの登校状況について** フリースクールを利用し始めてからの期間, フリースクールの利用頻度について尋ねた。

(3) **原籍校への登校状況** 原籍校への登校状況についても日本財団 (2018) を参考に尋ねた。

(4) **フリースクールでの過ごし方について** 「フリースクールでは普段どのようにして過ごしていますか。普段の過ごし方の全体を 10 としたときに, 何割そのように過ごしているかの数字を書いてください。」と教示して, 以下のカテゴリに対して 0~10 の数字で回答してもらった。カテゴリは加瀬 (2018) を参考にした, 「個別の学習」「授業形式 (講義形式) による学習」「スタッフに教えてもらう学習」「大学生ボランティア等に教えてもらう学習」「芸術活動 (音楽, 美術, 工芸など)」「スポーツ・運動」「相談・カウンセリング」のカテゴリの他に, 「他の生徒との雑談」「スタッフとの雑談」「大学生ボランティア等との雑談」「他の生徒とのゲーム (ボードゲーム含む)」「スタッフやボランティアとのゲーム (ボードゲーム含む)」「個別でのゲーム (ボードゲーム含む)」「グループワークやミーティング」「漫画・本を読む」とした。これら以外の活動については「その他①」~「その他⑤」までの選択肢を設けて, その他についての自由記述の回答欄も設けた。

(5) **フリースクールでのイベント・活動への参加について** 「どのようなイベントや活動に参加することが多いですか」について, 「参加しない・ほとんど参加しない」の選択肢も提示しながら尋ねる。以下のカテゴリの活動に対して, 「0: 参加しない・ほとんど参加しない」「1: まれに参加する」「2: ときどき参加する」「3: ほぼ毎回参加する」「4: 毎回参加する」の 5 段階で回答を求めた。カテゴリは加瀬 (2018) を参考にした, 「社会体験 (見学, 職場体験など)」「自然体験 (自然観察, 農業体験など)」「調理体験 (昼食づくりなど)」「芸術活動 (音楽, 美術, 工芸など)」「スポーツ体験」「宿泊体験」「学習成果, 演奏や作品などの発表会」のほかに, 「外部講師による講演会」「おしゃべりをする会」「他の生徒やスタッフやボランティアとのゲーム大会 (ボードゲーム含

む)」とした。これら以外の活動については「その他①」～「その他⑤」までの選択肢を設けて、その他についての自由記述の回答欄を設けた。

(6) **フリースクールでの楽しみについて** 「フリースクールではどのような活動・過ごし方をするのが好き、あるいは楽しいですか。1番目に好き・楽しいものから順に3番目に好き・楽しいものまで答えてください。」と教示して、以下のカテゴリから回答を求めた。「無い場合は空欄でも構いませんし、3番目まで埋めなくとも構いません」とも教示した。カテゴリは (4) と (5) の選択肢を合わせて「個別の学習」「授業形式(講義形式)による学習」「スタッフに教えてもらう学習」「大学生ボランティア等に教えてもらう学習」「社会体験(見学, 職場体験など)」「自然体験(自然観察, 農業体験など)」「調理体験(昼食づくりなど)」「芸術活動(音楽, 美術, 工芸など)」「スポーツ体験」「宿泊体験」「学習成果, 演奏や作品などの発表会」「相談・カウンセリング」「外部講師による講演会」「他の生徒との雑談」「スタッフとの雑談」「大学生ボランティア等との雑談」「おしゃべりをする会」「個別でのゲーム(ボードゲーム含む)」「他の生徒とのゲーム(ボードゲーム含む)」「スタッフやボランティアとのゲーム(ボードゲーム含む)」「他の生徒やスタッフやボランティアとのゲーム大会(ボードゲーム含む)」「その他①」「その他②」「その他③」「その他④」「その他⑤」(以下, 全カテゴリ)とした。

(7) **アイデンティティのきっかけとなっているフリースクールでの活動について** 「“自分らしさ”について考えたり, “自分とは何者か”を考えたりすることにつながる活動はありますか。以下のカテゴリについて, 1番目にあてはまるものから3番目にあてはまるものまで答えてください。無かったり, わからなくてもかまいません。その時は「ない・分からない」を「1番目」として回答してください。また, 3番目まで回答しなくとも構いません」と教示して, 全カテゴリの中から, 「分からない」「1番目」「2番目」「3番目」を選択して回答してもらった。

(8) **アイデンティティの取り組み** 多次元アイデンティティ発達尺度 DIDS 邦訳版尺度: DIDS-J (中間他, 2014) (5因子20項目, 4件法) を使用した。

#### 調査手続き

調査は2024年1月に行われた。Crowd Works を利用したデータ収集は Google フォームによるウェブ調査形式で行った。協力者には, 1) 調査の趣旨, 2) 調査の方法, 3) 参加は任意であり, 4) 回答の拒否, 中止をした場合でも何ら不利益を受けないこと, 5) 調査は匿名で行い, 6) データから個人が特定されないように厳重に保管されること, 7) 個人が特定されない形で結果が公表されることがあること, 8) 研究終了後データは破棄されること, を明記し, 参加に同意するかどうかの確認を求めた。同意した場合のみアンケートページに遷移し回答に進める構成となっていた。なお, 研究 I は東北大学大学院教育学研究科研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認 ID: 23-1-032)。

## 2-3 結果

### 分析対象者の特徴

分析対象者は中学生が 48.5% (n = 50), 高校生が 41.75% (n = 43), 「それ以上」が 8.74% (n = 9) であり, 欠損値 n = 1 であった。学校種別については, 「高校生」・「それ以上」の回答の 53 人のうち, 57%が「全日制高校」(n = 30), 6%が「定時制高校」(n=3), 19%が「通信制高校」(n=10), 19%が「在学していない」(n=10) と回答した。フリースクールに通い始めてからの期間が 1 年以内であるのは, 全体の約 74%, そのうち「1 か月」という回答も 18%程度ほどあった。「2 年」が 13%, 「3 年」が 11%, 「それ以上」が 3%であった。概ねフリースクールに通い始めてから 1 年以内の学生を対象としており, 97%が 3 年以内の学生であった。また, 通い始めの学生も 18%程度回答していたことが分かる。フリースクールへの登校頻度は, 「週に 5 日」が最も多く 25%で, 続いて「週に 6 日」「週に 7 日」は合わせて 21%, 少なくとも週に 1 日以上登校するのは 82%で, それより頻度が少ないのは 18%程度であった。

### フリースクールでの体験とそれへの評価

フリースクールでの過ごし方について, 教示通りに回答していた回答者は, 全体の 19% (n = 20) しかいなかったため, 各回答者ごとに新たに過ごし方指数を算出した(各カテゴリへの回答値を全カテゴリへの回答値の合計で除した)。分析対象者全体の過ごし方指数の和が高いほど, その過ごし方がより選択されていることになる。過ごし方指数の高いものから順に指数全体の過半数を超えるまで羅列すると, 「個別の学習」(指数全体の 13%), 「授業形式(講義形式)による学習」(指数全体の 11%), 「スタッフに教えてもらう学習」(指数全体の 10%) 「スポーツ・運動」(指数全体の 9%) 「他の生徒との雑談」(指数全体の 8%) であった。

「フリースクールではどのような活動・過ごし方をするのが好き, あるいは楽しい」かについて, 1 番目と回答されたものを 3 点, 2 番目と回答されたものを 2 点, 3 番目と回答されたものを 1 点とし, 分析対象者全体での合計得点から, より好まれている活動がどれかを評価した。その結果, 「ない・分からない」が最多となった(指数全体の 22%)。続いて指数が高いカテゴリを順に 5 つまで羅列すると「個別の学習」(指数全体の 14%), 「授業形式(講義形式)による学習」(指数全体の 10%) 「社会体験(見学, 職場体験など)」(指数全体の 9%) 「漫画・本を読む」(指数全体の 6%), 「芸術活動(音楽, 美術, 工芸など)」・「自然体験(自然観察, 農業体験など)」・「スタッフに教えてもらう学習」・「調理体験(昼食づくりなど)」(指数全体の 5%) であった。

「自分らしさ」について考えたり, “自分とは何者か”を考えたりすることにつながる活動についても同様に, 1 番目と回答されたものを 3 点, 2 番目と回答されたものを 2 点, 3 番目と回答されたものを 1 点とし, 分析対象者全体での合計得点から評価した。

その結果、「ない・分からない」が最多となった（指数全体の30%）。続いて指数が高いカテゴリを順に5つまで羅列すると「個別の学習」・「自然体験（自然観察，農業体験など）」（指数全体の10%），「授業形式（講義形式）による学習」（指数全体の9%），「社会体験（見学，職場体験など）」（指数全体の7%），「スポーツ体験」（指数全体の5%），「大学生ボランティア等に教えてもらう学習」（指数全体の4%）であった。

#### フリースクールでの体験とアイデンティティ形成の取り組みとの関連

フリースクールでの過ごし方とアイデンティティ形成の取り組みとの間の関連を検討するために，学年，高校種別，在籍期間，フリースクールへの登校頻度に加えて，フリースクールでの過ごし方についての各カテゴリの過ごし方指数を説明変数とし，DIDSの各下位尺度を目的変数するステップワイズ重回帰分析をDIDSの各下位尺度ごとに行った。その結果，「コミットメント形成」では，「グループワークやミーティング」（ $\beta = .35, p < .01$ ）「スタッフとの雑談」（ $\beta = -.25, p < .05$ ）がそれぞれ有意であった。

「コミットメントとの同一化」では，「グループワークやミーティング」（ $\beta = .29, p < .01$ ），「他の生徒とのゲーム（ボードゲーム含む）」，「漫画・本を読む」（ $\beta = -.22, p < .05$ ）がそれぞれ有意であった。「広い探究」では，「漫画・本を読む」（ $\beta = -.23, p < .05$ ）が有意であった。

フリースクールでのイベント行事に一つでも「参加」したことがある回答者は48%（ $n=49$ ）であった。イベント行事への参加とアイデンティティ形成の取り組みとの間の関連を検討するために，学年，高校種別，在籍期間に加えて，「フリースクールでのイベント・活動への参加」の回答を連続変数としたものを説明変数とし，DIDSの各下位尺度を目的変数するステップワイズ重回帰分析をDIDSの各下位尺度ごとに行った。その結果，「コミットメント形成」（ $\beta = .37, p < .01$ ）「コミットメントとの同一化」（ $\beta = .29, p < .01$ ）「広い探究」（ $\beta = .41, p < .01$ ）「深い探究」（ $\beta = .33, p < .01$ ）においては，「宿泊体験」のみが有意となった。「反芻的探求」においては，「芸術活動（音楽，美術，工芸など）」（ $\beta = .31, p < .01$ ）のみが有意となった。

#### 2-4 考察

アイデンティティの二重サイクルモデルの観点から考察する。まずアイデンティティ形成サイクルとは，「広い探究」と「コミットメント形成」によって特定のコミットメントを形成するサイクルのことである。形成サイクルでは，日々の過ごし方として「漫画・本を読む」過ごし方は「広い探究」に負に関連し，「スタッフとの雑談」は「コミットメント形成」に負に関連していた。一方で，「グループワークやミーティング」は「コミットメント形成」に正に関連していた。フリースクールの生徒たちはどのような漫画や本を読んでいるのだろうか。コミック読書経験やコミックの内容と基本的な性格特性との関連は希薄であることが示されている（諸井・板垣，2018）。広い探究とは，例えば

「自分にとってよいと思える色々な生き方について考えている」ことであり、いろいろな生き方について探ることができるような内容の本や漫画もあると考えられるが、本研究の結果では「広い探究」には寄与しない可能性が示された。また、「スタッフとの雑談」は「コミットメント形成」には寄与しない可能性が示された。横断的な研究結果であるため、因果関係は定かではないが、寧ろ「自分の進みたい人生がわかってい」ないからこそ大人であるスタッフと雑談をする可能性もあると考えられるだろう。本研究で用いたカテゴリにおいては、スタッフや大人への悩み事の相談などは、それがカウンセリングと判断されない限りはこの「スタッフとの雑談」として選択される可能性が高いかもしれない。「グループワークやミーティング」については、どのような内容を実施しているかは定かではないが、コミットメント形成に寄与する可能性が示された。アイデンティティ形成を促進させる手法として、複数人でのミーティングの効果が示されていることから、グループワークやミーティングに参加することで特定のコミットメントの形成が促進される可能性がある。しかし、特定のコミットメントがあるからこそ、積極的にそういったものに参加できるという場合もあると考えられ、因果関係については検討の余地があるだろう。

続いて、アイデンティティの維持・評価サイクルについてである。維持・評価サイクルは「深い探究」と「コミットメントへの同一化」によって、既存のコミットメントを維持したり評価したりしていく過程である。この維持・評価サイクルにおいても、形成サイクルと同様にグループワークやミーティングがポジティブに寄与する可能性が示され、漫画や本を読むことがネガティブに寄与する可能性が示されたことに加え、「他の生徒とのゲーム（ボードゲーム含む）」がネガティブに寄与する可能性が示された。

イベントの参加においては、「宿泊体験」が形成サイクル、維持・評価サイクルに限らずアイデンティティの取り組みと関連する可能性が示され、「芸術活動」と反芻的探究と関連する可能性が示された。

### 3. 研究Ⅱ

#### 3-1 目的

フリースクールの卒業生を対象に、前方視的再構成法の要素を取り入れたインタビュー調査を行い、フリースクールでの経験は現在においてどのように意味づけられているのかを検討する。

#### 3-2 方法

**事例の抽出と調査の手続き** 大学講師をしている A さん（性別その他、28 歳）を対象に 2024 年 2 月に半構造化面接を行った。A さんは中学 3 年生の時から 1 年間、適応

指導教室に通っている。Aさんは筆者の知り合いであり、以前から不登校やフリースクールについて話を交わすことがあった。能智(2004)によれば、質的研究のサンプリングでは検討したい現象やプロセスについて最も豊かな情報をもたらしてくれると予想されるサンプルを抽出するべきだとされ、筆者からみて適格だと判断されたため、Aさんに依頼をした。

**面接調査の質問内容** 以下の項目を含む半構造化面接を実施した。1) フリースクールに通うまでの経緯, 2) どのようなフリースクールでどのように過ごしていたか, 3) フリースクールの経験は現在の自分とどのように関連しているか, 4) フリースクールの経験は、“自分らしさ”や“自分とは何者か”を考えることにどのようにつながっていたか, 5) 項目3)や項目4)について、“当時はどう思っていたか”を尋ねた。前方視的再構成法としては、より精緻で複雑なプロセス(白井, 2011)があるが、本研究ではその手法は使用せずに、項目5)を尋ねることによって、後方視(回顧)的に語られた内容から、前方視的な語りを区別しようと試みた。

**倫理的配慮** 調査は本人の承諾を得て行い、本人の意思に基づくものであった。面接調査の概要を説明し、調査同意書へのサインをもらった。同意撤回書も送付し、いつでも同意を撤回できることを説明した。なお、研究Ⅱも同様に東北大学大学院教育学研究科研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認ID: 23-1-032)。

### 3-3 結果と考察

**コミュニケーションの機会** Aさんは適応指導教室への通所していた期間を振り返り、「人とコミュニケーションをポジティブに取るってことの練習期間というか、にはなっていた気がするな。今考えると、<結構コミュニケーションを取る機会になったというか?>( <>内はインタビューである筆者の発言。以下、同じ) 少なかった気がするね。特に小5から中2までの間は、何か気遣って訪問相談員の人とか学校の先生とか、連絡取ってる友達も一応いるにはいたけど、二、三人ぐらいと会ったりはしてたけど、でもだよな。」と不登校期間と比較し、適応指導教室がコミュニケーションを取る機会だったと振り返っている。Aさんは教室での自由時間には主にキャッチボールや野球をして過ごしていたと話しており、そういった活動を通してコミュニケーションの機会になることについて、当時はどのように思っていたのかを尋ねると、「それは問いとして意味をなしていないような気がするな私は。野球しておもしろいだったら、バッティングセンターに行くことと等価になるはずだけど、やっぱりそうではない気はしてて。当時自己記述を与えていたかはさておき、そういうような理解のもとで行く以外は無いような気もするけどな。多分でもそれなりにみんな自分の人生の中での意味づけにおいて多分、将来のことを見据えて、来てるっていう子が大半だった気がするかな」と、当時から将来のことを見据えて通所していた生徒が大半だったと振り返っている。



**不登校のスティグマに対して** Aさんは適応指導教室を利用し始める前に一度見学に行ったが、「当時不登校って結構強いスティグマだったと思うから、不登校である自分を認めたくないっていう部分が少なからずあって」と振り返っていた。一方で、フリースクールに特殊な経験として記憶に残っているエピソードとして以下のことを話してくれた。「フリースクールのいつものメンバーが風邪ひいて休んでるときに、他の子が、『アイツ不登校になったんかな』と言って、ほかのやつが『いやみんな不登校だから』と言って、ガハハってみんなで笑うみたいことがあって、それはなんというか、すごい覚えてるな」というエピソードがあったという。Aさんは不登校に対するセルフスティグマを当時感じていたことを回顧し、一方でそれを利用してユーモアとするようなやりとりが適応指導教室の中であったことを印象深いこととして振り返っており、セルフスティグマが和らいでいく過程であったと考えられた。

**リベラルな価値観** Aさんに適応指導教室での経験と現在の自分との関連について尋ねると「現状の社会においては弱い立場に位置づけられやすい性格的な気質を持った人が多かったから、自分自身のそのリベラルな価値観にもだいぶ影響を与えている気がする。僕もそうだけど、一般的ないわゆる普通の鍵括弧付きの普通の路線に乗っかってても多分みんなうまくいかないだろうっていう自覚は、何となくあったろうし多分今も持っているんじゃないかなっていう気もするんだよね。逆にでもそれはいいことでもあって、それぞれ勝手に好きなことやっているっていう感じもある」と語られた。当時の体験は現在の政治的な価値観からも回顧的に意味づけられていた。

**自分らしさについて** Aさんに自分らしさとは何かと尋ねると、「自分らしさに関する問いは、何かアイデンティティみたいなものが言語的に言及可能であるっていうことがまず前提としてあるわけじゃない。反省的に鑑みることのできる言語化できる自己みたいなものって自己の一部で、むしろその非反省的な部分が大きいような気がするんだよね。身体的な部分って言い換えてもいいかもしれないけど。やっぱそういう意味で言うと、自分らしさっていうのは、何か認識され得ない、自己の身体性というか、身体感覚的なものに近しいとは思う。でもそれはやっぱ言語化できないからっていう印象だから、ストレートには答えられない」と語られた。また、「制度化された学校みたいなどころに行くと、いわゆる学校学校したところに行くと、なんかね嫌な感じするんだよね。建物に対して悪い経験があるわけではないけど、なんていうか、多分何かそういうのがある」とも語られた。Aさんの考える“自分らしさ”とは言語化できない身体感覚であり、それは学校のような場所に対する「嫌な感じ」において感じる話が話された。Aさんの通っていた適応指導教室は学校校舎の一部の教室が利用されていたが、机や椅子の備品は学校のものではないものが準備されており、教室の雰囲気も“学校的ではない”空間が目指されていたとのことだった。

### 総合考察

本研究は、フリースクールでの体験とアイデンティティプロセスとの関連性を量的、質的に検討することが目的であった。研究Ⅰからは、日常的な過ごし方としての「グループワークやミーティング」や、イベントとしての「宿泊体験」がアイデンティティの形成サイクル及び維持・評価サイクルにポジティブに関連する可能性が示された。一方で、「漫画・本を読むこと」や「他の生徒とのゲーム（ボードゲーム含む）」をすることは形成サイクル及び維持・評価サイクルにネガティブに関連する可能性が示された。研究Ⅱからは、Aさんの体験においては、不登校期間を経て、適応指導教室がコミュニケーションをとる場所となっており、当時から将来のことを見据えて通所していた生徒が大半だったと振り返っている。また、不登校へのセルフスティグマに関する印象深いエピソードが話され、セルフスティグマが和らいでいった過程となっていたことが示唆された。Aさん自身が現在の政治的な価値観から回顧的に当時の体験を意味づけている語りも見られた。また、Aさんが現在において語る身体感覚としての“自分らしさ”は、適応指導教室での“学校的ではない”空間での体験と矛盾しない語りになっていた。

本研究の課題としては、研究Ⅰでは横断的な関連を示すに留まっていた点が挙げられる。「スタッフとの雑談」がコミットメント形成に負に関連していたことなど、因果関係の検討の余地があるような横断的な関連性が示されており、今後検討の必要があるだろう。また、研究Ⅱにおいて十分なサンプル数のインタビューを実施することができなかった。引き続きインタビュー調査を実施し、質的な分析手法を適応する必要があるだろう。

### 引用文献

- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 西平 直・中島由恵(訳)(2011). *アイデンティティとライフサイクル* 誠信書房)
- 加瀬進 (2018). フリースクール等の支援の在り方に関する調査研究報告書 <http://www.we-collaboration.com/mt/20180330%20free%20school.pdf>.
- Luyckx, K., Schwartz, S. J., Berzonsky, M. D., Soenens, B., Vansteenkiste, M., Smits, I., & Goossens, L. (2008). Capturing ruminative exploration: Extending the four-dimensional model of identity formation in late adolescence. *Journal of research in personality*, 42(1), 58-82.
- 文部科学省 (2016). 不登校児童生徒への支援に関する最終報告—一人一人の多様な課題に対応した切れ目のない組織的な支援の推進—.
- 諸井克英・板垣美穂 (2019). コミック読書経験の基底にある性格特性 同志社女子大学生活科学, 52, 12-20. <http://doi.org/10.15020/00001656>.
- 本山敬祐 (2011). 日本におけるフリースクール・教育支援センター (適応指導教室)

の設置運営状況 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60, 15-34.

中間玲子, 杉村和美, 畑野快, 溝上慎一, & 都筑学. (2015). 多次元アイデンティティ発達尺度 (DIDS) によるアイデンティティ発達の検討と類型化の試み. 心理学研究, 85(6), 549-559.

日本財団 (2018). 不登校傾向にある子どもの実態調査. [https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/01/new\\_inf\\_201811212\\_01.pdf](https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/01/new_inf_201811212_01.pdf)

能智正博 (2004). 理論的なサンプリング 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ (編) ワードマップ 質的心理学—創造的に活用するコツ— 新曜社, pp.78-83.

白井利明 (2011). 時間的展望と自己—人生が立ち上がる前方視的再構成法— 榎本博明 (編) 自己心理学の最先端 あいり出版, pp.1-10.

白井利明 (2022). 自己連続性の構築 白井利明・杉村和美(編) アイデンティティ—時間と関係を生きる— 新曜社 pp.79-128.

山本絵梨・宮崎圭子. (2020). フリースクールでの「斜めの関係」が不登校生徒に及ぼす影響の検討—インタビュー調査を通して—. 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, (16), 189-202.